

Thou Swell

君はすてき

New York Trio

ニューヨーク・トリオ

- 君はすてき**
Thou Swell（4：09）
- マイ・ファニー・バレンタイン**
My Funny Valentine（7：13）
- 時さえ忘れて**
I Didn't Know What Time It Was（5：18）
- 何時か何処かで**
Where Or When（7：45）
- 息もつまって**
My Heart Stood Still（5：49）
- ザッツ・フォー・ミー**
That's For Me（4：12）
- ミス・ジョーンズに会ったかい？**
Have You Met Miss Jones?（3：56）
- スモール・ホテル**
There's A Small Hotel（4：41）
- わが心に歌えば**
With A Song In My Heart（6：48）
- 一度彼女をみてごらん**
Wait Till You See Her（5：07）

~ All Songs by Richard Rodgers ~

ビル・チャーラップ Bill Charlap（piano）
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart（bass）
ビル・スチュアアート Bill Stewart（drums）

録音：2006年9月30日、10月1日　クリントン・スタジオ、ニューヨーク

©© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at Clinton Studio in New York on September 30 & October 1 , 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover：(c) Genevieve Naylor/Corbis
Artist Photos by John Abbott
Designed by Taz

ジョージ・ガーシュイン、ビル・チャーラップ、ジェイ・レオンハート、ビル・スチュワート

ジャースもハートもハーマースタインもコロンビア大学の音楽仲間だった。代表的なミュージカルは、ロジャース～ハート時代(1920～42年)は、『コネチカット・ヤンキー』『ジャンボ』『ペイムス・イン・アームズ』『パル・ジョーイ』『バイ・ジュビター』などがある。ロジャース～ハーマースタイン時代(1943～60年)は、『オクラホマ！』『回転木馬』『南太平洋』『王様と私』『サウンド・オブ・ミュージック』などがある。このミュージカルのリストを見れば、圧倒的にハーマースタイン時代に有名な作品が並んでいることがわかるが、不滅の名曲の数という点ではハート時代に重配があがる。ハート時代は都会的に洗練されたソング・スタイルが特徴で、ハーマースタイン時代は一般大衆受けのする曲が多かった。大戦後にミュージカルが大作志向を強めたことや、芸術志向のロレンツ・ハート、エンタテインメント志向のオスカー・ハーマースタイン3世という個性の違いも反映されたのだろう。いずれにしても、ジャズ・スタンダードという視点においては、ロジャース～ハート時代のほうが名曲が多いのである。エラ・フィッツジェラルド、オスカー・ピーターソンなどのリチャード・ロジャース作品集もハート時代がメインだった。今回のニューヨーク・トリオのアルバムも「ザッツ・フォー・ミー」を除いてすべてがロジャース～ハートの作品である。ちなみに、2001年にリチャード・ロジャースの生誕100周年を記念するアルバム『The Richard Rodgers Centennial Jazz Piano Album』がリリースされたが、ビル・チャーラップはアルバムの冒頭を飾っている。録音は前回の「ザ・スタジオ」ではなく、クリントン・スタジオで行なわれた。ピアノはフルコンサート仕様のスタインウェイD型を使用。ビル・チャーラップは20曲くらいレコーディングに用意して、その場の気分でここに収録されたナンバーが演奏された。即興性を重視し、ユニットとしての完成度が最高潮に達したニューヨーク・トリオの演奏の素晴らしさは、このディスクをお聴きのとおりである。

君はすてき(ザウ・スウェル)
ミュージカル『コネチカット・ヤンキー』(1927年)の主題歌。アーサー王の宮廷にワープする物語だ。ザウ(Thou)はYouの古語、SwellはWonderfulの俗語。このミュージカルからは「マイ・ハート・ストゥッド・スティル」も生まれた。パイオリン奏者ベン・セルヴィンのオーケストラが28年にヒットした。ニューヨーク・トリオは、ビル・チャーラップの軽快なテーマ演奏から始まり、息の合った絶妙なインタープレイとアドリブを展開させる。

マイ・ファニー・バレンタイン
リチャード・ロジャースの最大のヒット曲。ミュージカル『ペイプス・イン・アームズ』(1937年)から生まれた。ロジャース&ハートの脚本第1号作品でもある。物語はロングアイランドでボードピアンを親に持つこともたちが農場を守り、ショーを企画するという内容だ。2年後、ジュディ・ガーランド主演の同題映画では、なぜかこの曲は使われなかった。この曲はちょっと変わった愛情表現が示されるラブ・ソングで、バレンタイン・デイにちなんだ曲としても聴かれている。ここでは、テンポを落とした超スローなバラードとして演奏されており、ビル・チャーラップの表現はこれ以上ないと思える程の深みへ達する。一言、一言に注がれる思い、タッチの美しさに惹き込まれる。

時さえ忘れて
カレッジ・コメディもののミュージカル『トゥー・メニー・ガールズ』(1939年)のために作曲された。愛に夢中になった日々を想い出す曲だ。モダン・ジャズの録音が多く、女性シンガーにも好まれている。ニューヨーク・トリオはダブル・テンポでワン・コーラスを演奏し、自由なアドリブへ移行する。この曲に対する親和性の高さを感じさせるバージョンだ。ユニットとして一体化したピアノ・トリオのドライブ感も素晴らしい。

何時か何処かで(ホエア・オア・ホエン)
ニューヨーク・トリオがゆったりとした情感を表現するこの曲は、<マイ・ファニー・バレンタイン>と同じく、ミュージカル『ペイプス・イン・アームズ』(1937年)から生まれたスタンダード・ソング。あなたはいつかどこかで会ったような気がする」と歌われる歌詞だ。ポピュラーなスイート・バンド、ハル・ケンブ楽団が37年に大ヒットさせた。

息もつまって(マイ・ハート・ストゥッド・スティル)
<ザウ・スウェル>と同じく、ミュージカル『コネチカット・ヤンキー』から生まれたスタンダード・ソング。28年にジョージ・オルセン楽団などのポピュラーなダンス・バンドがヒットさせた。ここでもベースのジェイ・レオンハートとドラムのビル・スチュワートの堅実なビート・キープが進行する中、ビル・チャーラップが歌心豊かなメロディアスな演奏をみせる。

ザッツ・フォー・ミー
ミュージカル映画『ステート・フェア』(1945年)のナンバー。作詞はロレンツ・ハートではなく、オスカー・ハーマースタイン2世。ジョー・スタッフォード、ディック・ヘイムスらの歌がヒットしたロマンティックなラブ・ソングだ。ちなみに、映画『ステート・フェア』の主題歌は「春の如く」で、スタンダード・ソングになった。ロジャースの代表曲の中ではマイナーな存在だが、ニューヨーク・トリオの演奏が美しい名曲であることを教えてくれる。

ミス・ジョーンズに会ったかい？
ミュージカル『アイド・ラザー・ビー・ライト』(1937年)の主題歌。ニューディール政策を風刺したミュージカルで、恋人の収入が安定するまで結婚できないジョーンズ嬢をユーモラスに描いた。速いテンポで快適にノリにノったニューヨーク・トリオの演奏が展開される。ビル・チャーラップの即興から次々に生まれるフレーズの素晴らしさが印象的だ。

スモール・ホテル
ミュージカル『ジャンボ』(1935年)と『オン・ユア・トウズ』(トウズのスペルはToesで、パレエヤタップが登場する話：1936年)で使われて、ハル・ケンブ楽団が36年に大ヒットさせた。「ゼアス・ア・スモール・ホテル」が原題で、恋人同士が「2人きりでいられる場所に行こう」と歌うロマンティックなナンバーだ。ここでも、ビル・チャーラップのころがるような心地よいピアノ演奏に聴きいってしまう。

わが心に歌えば(ウイズ・ア・ソング・イン・マイ・ハート)
ミュージカル『スプリング・ジョーズ・ヒア』(1929年)から生まれた。同年、レオ・ライズマン楽団、歌手のジェームス・メルトンがヒットさせた。ジャズ・トランベッターが主役のヒット映画『情熱の狂想曲』に使われたこともあり、トランベッターに好まれる曲になったようだ。ビル・チャーラップのテーマ演奏を中心にして、ピアノ・トリオの3人がそれぞれ個人的なアプローチをみせがらも、ユニットとしての一体感の素晴らしさに舌を巻く。チャーラップのインスピレーションは尽きることがないようだ。

一度彼女を見てごらん(ウェイト・ティル・ユー・シー・ハー)
ロジャース～ハートの最後のミュージカルとなった『バイ・ジュビター』(1942年)中のバラード。あまり有名ではない決めのスタンダード・ソングだが、マイルス・デイビス、フィル・ウッズらの録音がある。アルバムのラストにふさわしく、心をやさしく温めるようなナンバーで、リチャード・ロジャース作品集のクロージングを惜しむかのような情感が表現されている。

(高井信成)

ビル・チャーラップ、ジェイ・レオンハート、ビル・スチュワートからなる現代屈指のピアノ・トリオ“ニューヨーク・トリオ”のニュー・アルバム『君はすてき』は、リチャード・ロジャース作品集。ニューヨーク・トリオの通算6枚目で、ひとりの作曲家をテーマにしたニューヨーク・トリオのソングブック企画は、これで3枚目となる。ビル・チャーラップはブルー・ノートのリーダー・アルバムでもレギュラー・トリオでソングブックをシリーズ化しており、今や、ソングブックといえばビル・チャーラップ、というイメージがすっかり定着している。最初にその録音リストを整理しておこう。

ニューヨーク・トリオ(Venus)
リチャード・ロジャース作品集『君はすてき』(2006年)
コール・ポーター作品集『ピギン・ザ・ピギン』(2005年)
デューク・エリントン作品集『ラブ・ユー・マッドリー』(2003年)
ビル・チャーラップ・トリオ(Blue Note)
ジョージ・ガーシュイン作品集『ブレイズ・ジョージ・ガーシュイン』(2005年)
レナード・バーンスタイン作品集『サムホエア～レナード・バーンスタイン作品集』(2004年)

ホーギー・カーマイケル作品集『スターダスト』(2002年)
以上の6枚がビル・チャーラップ関連のソングブック・アルバムだ。ソングブックは、昔から人気のある企画だが、決して安易に挑めるものではない。その作曲家に対する造詣と愛情の深さ、演奏者の高いテクニックと深い表現力が必要とされる。そうでなければ、内容の薄いアルバムになってしまう。過去にソングブック・シリーズで成功を収めたアーティストには、オスカー・ピーターソン、エラ・フィッツジェラルド、サラ・ボーンなどがいる。彼らの顔ぶれを考えれば、超一流のアーティストのみ名作シリーズにできるといえる。彼らがソングブック・シリーズを録音したのは1950年代。ビル・チャーラップはそれから約半世紀後にソングブック・シリーズでジャズの巨人たちと肩を並べる成果を残したアーティストとなるわけだが、その間にもこういう例があったか思い浮かばない。そもそも、ビル・チャーラップはスタンダード・ソングに一倍、いや群を抜いて、造詣と愛情が深いピアニストであり、ソングブックは彼に打って付けの企画である。1966年生まれのビル・チャーラップの父親ムース・チャーラップは、ブロードウェイ・ミュージカルの作曲家、母親サンディ・スチュワートはジャズ&ポップス・シンガー。今ではそのプロフィールは日本のジャズ・ファンにもよく知られているだろう。母親サンディとは近年デュオを組んで活動しており、2005年には2人の共演作『ラブ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ』(Blue Note)がリリースされた。サンディのボーカルの、コンコード時代のローズマリー・クルーニーを思わせる。父親ムースはビルが7歳のとき死去しているが、ビルが幼い頃、マンハッタンにあったチャーラップ家では、作曲家仲間を迎えてよくホーム・パーティーが開かれた。その中には、作詞コンビのアラン&マリリン・バーグマン夫妻(「追憶」「これからの人生」他)、作詞家のE.Y.ハーバーク(「虹の彼方に」「ベイバー・ムーン」他)、作曲家のチャールズ・ストラウス(「バイ・バイ・パーディー」「ワンス・アポン・ア・タイム」他)らがいる。ブロードウェイ・ミュージカルから生まれたスタンダード・ソングは、ビル少年の子守唄となり、からだの中に入りこんだ。ビル・チャーラップにとってスタンダード・ソングの演奏は“天命”のようなものだったのである。もちろん、彼は努力も怠らない。スタンダード・ソング博士と呼びたくなる程のぼう大な曲数をインプットするのは容易くなかったはずだ。その中でも、特にお気に入りの作曲家たちが、ソングブック・シリーズに登場してきているわけだ。タイム誌に掲載されたビル・チャーラップの記事にこんな記述がある。「ビル・チャーラップの最も深い情熱は、コール・ポーター、ジョージ・ガーシュイン、そしてリチャード・ロジャースといったアメリカの偉大なる作曲家たちのソングブックに注がれる。作曲の歴史について、彼はこう説明する。“彼らの曲は、真実のアメリカン・スタイルの新しい設計図を写し出す。時代を超越するベートーベンのように、彼らも非常に重要で現代的でなくてはならない存在である。”」また、別の機会でビル・チャーラップが名前をあげた重要な作曲家は、ハロルド・アーレン、ジョージ・ガーシュイン、コール・ポーター、アーヴィング・バーリン、ジェローム・カーン、そしてリチャード・ロジャースだった。ビル・チャーラップとニューヨーク・トリオのソングブック・シリーズは今後も続くと思われるが、今回のリチャード・ロジャース集が彼にとって重要な到達点であったことは容易に想像できる。リチャード・ロジャースは数え切れないくらい名曲を送り出した偉大なる作曲家だ。ロジャースは1902年ニューヨーク生まれで、1920～50年代のブロードウェイ・ミュージカルをリードした。ミュージカルの発展と繁栄に果たした貢献は計り知れない。いわば“ブロードウェイの王様”である。ロジャースのキャリアは、2人の作詞家ロレンツ・ハート、オスカー・ハーマースタイン3世とそれぞれコンビを組んだ時代に分けられる。ロ